



Title	人間学とことば学として知識社会学を読み解く : 第二言語教育学のためのことば学の基礎として
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2018, 22, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67901
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間学とことば学として知識社会学を読み解く

— 第二言語教育学のためのことば学の基礎として —

西口 光一*

要 旨

社会の弁証法の3つの契機である外在化と客体化と内在化を含む人間学的必然性を背景として、Berger and Luckmann (1966) と Berger (1967) により提唱された知識社会学は、人間観と言語観に関して言語教育者に重要な洞察を与えてくれる。本稿は、知識社会学とは何かという議論から始まり、知識社会学における人間観と言語観の議論に進む。さらに、知識社会学の現象学的な観点にも言及する。現象学的な観点では、言語がわたしたちの世界構築の営みの中心に置かれる。最後に、発話は状況的行為と超状況的な歴史的側面とコードのシステムとしての側面という3つの側面を有することを指摘し、教育や授業の企画・計画・実践において第二言語教育者は、発話のこのような成り立ちと特性を十分に考慮しなければならないと結論づける。

【キーワード】 知識社会学、人間学的必然性、現象学、志向性、ノエシスとノエマ

はじめに

教育の企画にせよ、授業の計画にせよ、第二言語教育について考える場合には、当該の言語についての研究やコミュニカティブ・コンピテンスなどの用語の下での言語コミュニケーションに関する研究が一般的に参照されてきた。それが第二言語教育を構想する場合のオーソドックスだということである。しかし、言語や言語コミュニケーションなどについての見解を提出しているのは言語関係の研究分野だけではない。例えば、言語哲学（バフチン、ウィトゲンシュタインなど）や発達心理学（ヴィゴツキー、ブルーナーなど）などからも言語や言語コミュニケーションなどについての重要な見解が提出されている。そして、それらはそれぞれの立場から第二言語教育学に対して洞察のある視点を提示している（西口, 2003; 2013; 2015; 2017 など）。社会学の理論はこれまで第二言語教育者が注目することのなかった領域であり、そこからも重要な見解と洞察のある視点

が得られることが期待できる。こうした筆者の試みはいずれも、狭くなりがちな第二言語教育者の言語についての視野を拡大して豊かにし、より広範な展望に立って教育の企画や教育実践の創造ができるようになることを意図したものである。

そのような関心で注目されるのは、現代社会学の枢要な理論となっている Berger and Luckmann (1966) 及び Berger (1967) の知識社会学である。現代社会学の重要な見方である人間学的必然性 (anthropological necessity) を明確な形で提示した彼らの理論は、同時に優れた人間学とことば学¹⁾ともなっている。本稿では、彼らの知識社会学を人間学とことば学として読み解き、言語の特性についての洞察を抽出する。また、第二言語教育学への橋渡しとなる議論もごく簡潔に行う。

本稿の流れについて述べる。第1節では、知識社会学の中核をなす人間学的必然性を中心としてそこから導き出される客観的現実としての社会について論じる。そして、第2節では、そうした社会との関

* 大阪大学国際教育交流センター教授

係における人間という知識社会学における人間観を提示する。続く第3節では知識社会学における言語の基本的な捉え方について論じる。次に、第4節では、知識社会学における言語についての議論をさらに検討して整理し、第5節では、現象学的な観点を含めて、知識社会学から導き出される言語の特性について論じる。最後に、本稿で明らかにされた言語についての視点から得られる第二言語教育と第二言語教育学への主要な示唆を提示する。本稿での論点は、文化心理学や文化人類学、そしてナラティブ心理学や対話原理などにつながるものが多いが、本稿では第4節でノモスとBrunerのフォークサイコロジとの関係を指摘するに留め、詳しい議論は今後の稿に譲る。

1 知識社会学

1-1 知識社会学とは

Berger and Luckmann (1966) によると、従来の知識社会学の関心は、理論レベルにおいては認識論的問題に、経験的レベルにおいては精神史の問題に向けられてきた。彼らはこうした問題設定の妥当性と重要性は十分に認めているが、敢えてそうした認識論的問題と方法論的問題を排除すると宣言した上で、現実の社会的構成の分析を問題にする新たな知識社会学の構築をめざした。その新たな知識社会学では、理論的なものであれ前理論的なものであれ、また当該の知識の妥当性や非妥当性に関係なく、社会において知識として通用するものはすべて対象にされる。そして、いかなる知識体系であれ、それが現実として社会的に確立されるに至る過程を主要な関心とする。

この新たな知識社会学は、社会学理論の一つの試みである。そして、「主観的な意味が客観的事実性になるのはいかにして可能なのか」を社会学理論の中心的な問題であることを確認しつつ、知識社会学としては観念よりも常識的な知識こそが中心的な焦点にならなければならないと言う。「意味の網の目を織り成しているのはまさしくこうした<知識>であり、この網の目を欠いては社会は存立し得ない」(Berger and Luckmann, 1966, p.27, 邦訳 p.21) からである。以下では、こうしたバーガーとルックマンの知識社会学を単に知識社会学と呼ぶ。

知識社会学は Berger and Luckmann (1966) で初め

て提示されたものであり、Berger (1967) の第1章はその議論を一層わかりやすく、そして凝縮した再論となっている。本稿の目的のためには、後者がひじょうに有用なので、本節から第3節までは主としてそれを参照して議論を進めることとする。本節では知識社会学の中核をなす人間学的必然性とそこから導き出される客観的現実としての社会について論じる。

ここで引用中の強調と邦訳について説明しておく。Berger (1967) については、傍点による強調は原著、太字による強調は筆者による。その他からの引用については、逆に、傍点による強調は筆者で、太字は原著となる。引用中の< >は原著では“ ”となっている。いずれの引用も表記法の変更なども含めて英文原典を参考にして一部改訳している。また、本文中では、必要に応じて原語を括弧内に示している。

1-2 人間学的必然性

Berger (1967) は、「社会は一種の弁証法的現象である」という基本見解を提示するところから知識社会学の議論を始める。この見解がマルクスの思想に由来することは言うまでもない。

社会は一種の弁証法的現象である。…**社会は人間の所産**である。社会は人間の活動と意識によって与えられるもの以外を何一つもっていない。人間を離れて社会的現実はある得ない。ところが、**人間は社会の所産**であるということも言えるだろう。個人の生涯は社会史のうちのエピソードにすぎない。…社会のうちにあって他者との社会過程の結果としてこそ、各個人は一人の人間となり、アイデンティティを形成し維持して、そして彼の生涯を造り上げるさまざまな目標に取り組むのである。人間は社会を離れては存在し得ない。(Berger, 1967, p.3, 邦訳 p.4)

このような見解を示した上で、Berger は速やかに社会と人間との間に成立している人間学的必然性 (anthropological necessity) としての弁証法の3つの契機、つまり外在化 (externalization)、客体化 (objectivation)、内在化 (internalization) を提示する。

外在化とは、人間存在が物と心の両面の活動

によって世界に絶えず流れ出すことを言う。**客体化**とは、この（物心両面にわたる）活動の所産によって当初の生産者に外在し疎外する事実として彼らに対立する現実が成立することである。**内在化**とは、この同じ現実の人間による再専有を言い、これをもう一度客観的世界の枠組みから内的意識の組成の中に変容せしめるのである。外在化を通してこそ社会は人間の所産となる。客体化によってこそ社会はまさに現実となる。また、内在化を通してこそ人間は社会の産物となる。(Berger, 1967, p.4, 邦訳 p.5)

これを図式的に示すと、図1のようになるだろう。こうした循環を通して社会の弁証法的運動が進行するのである。

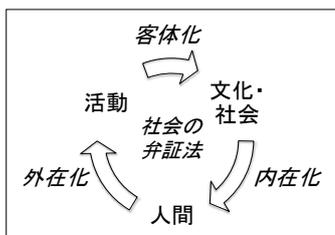


図1 社会の弁証法の3つの契機と人間学的必然性
(筆者作成)

本節の以降と第2節では、外在化から始めてこの図の各部について順次論じていく。

1-3 外在化と文化

Bergerは、外在化は人間学的な必然性であると改めて指摘した上で、外在化という人間特有の現象について以下のように論じる。

人間でない動物は、高度に特化されしっかりと方向づけられた衝動をもって世界に参入する。その結果、その本能の構造によって多かれ少なかれ完全に決定された世界の中に生きる。動物の世界は生き方の可能性に関して閉じられている。…これに反して、出生時の人間の本能の構造は種族特有の環境に導く特化が希薄で方向づけもされていない。…人間にはヒトの世界がないのである。人間の世界は、彼の身体特性によっては不完全にしかプログラム化されていない。それは一種の開かれた世界である。つまり、人

間自身の営みによって形造られるべき世界なのである。(Berger, 1967, p.5, 邦訳 pp.7-8)

そして、こうした人間の身体特性の特異性に基づく外在化が、人間が自身のために造り、自身の中で生きる文化を創造することにつながるのである。

生物学的にヒトの世界をもちあわせないので、彼は人間世界を構築する。この世界は、言うまでもなく文化である。そして、文化の根本的目的は、**生物学的に欠けている生きることの確かな構造**を提供することである。(Berger, 1967, p.6, 邦訳 p.9)

こうして文化は、人間にとって「第二の自然」となるが、それは人間の所産であるがゆえに自然とは違った性質のものとなる。

文化は、人間によって**不断に生産され、再生産されなければならない**。だから、その構造は本来的に**不安定で変化すべき運命**にある。(Berger, 1967, p.6, 邦訳 p.9)

1-4 文化と社会

Bergerは文化には物質的な側面と非物質的な側面があることを指摘した上で、社会を文化の重要な部分として説明する。

文化は人間による所産の総体からなっている。その一部は物質であり、他は物質ではない。人は、およそ思いつく限りの多種多様な道具を作り出し、それらを用いて物理的環境を修正し自然を自身の意思の下に変形する。…**社会**は、言うまでもなく非物質文化の重要な部分にほかならない。社会は、人間が仲間と不断の関係を構成する非物質文化の一側面である。(Berger, 1967, pp.6-7, 邦訳 p.10)

しかし、社会について重要な点はそれだけではない。社会は文化形成の中で特権的な地位を占めると指摘してBergerは次のように論じている。

世界構築という経験的現実はずねに社会的なものである。…人々は**共に**道具を作り、言葉を

発明し、価値を信奉し、制度を工夫して作る。文化への個人の参与は、社会過程（すなわち、社会化とも呼ばれる過程）に依存するばかりか、彼が引き続いて文化的に存在できるかどうかは、彼が特定の社会構成を維持できるかどうかにかかっている。だから、社会は文化の所産であるばかりか、**文化の必要条件**なのである。社会は人々の世界構築の営みを組織し、配分し、調整する。そして社会においてのみ、こうした営みが産み出すものは時間を超えて持続するのである。(Berger, 1967, p.7, 邦訳 p.12)

そして、ここに言う「時間を超えて持続する」ものが、客体化されて客観的な現実性を帯びるのである。つまり、Berger and Luckmann (1966) が詳しく論じているように、社会は多かれ少なかれ類型化された諸活動の集合体だというふうに捉えられるだろう。社会学の研究対象となるのは、こうした客観的な事実性である。

2 知識社会学の人間観

2-1 社会と人間

客観的現実の地位を得るに至った社会は、人が棲む世界を提供する。

この世界は個人の生涯を包み込み、生涯は一連の出来事としてその世界の中に展開する。実際、個人の生涯は、それが**社会的世界の意味ある構造の中で理解される限りにおいてのみ客観的にリアル**なのである。…言い替えば、自分の人生は、それが本来的に客観的現実なる性格をもつ社会的世界のうちに置かれるときのみ、自分にも他人にも客観的にリアルなものに見えるのである。(Berger, 1967, p.13, 邦訳 p.19)

そして、より詳細に言うと、社会の客観性は社会の構成要素のすべてに及ぶ。

制度、役割、アイデンティティはすべて社会的世界の中で客観的にリアルである。…例えば、特定の社会における性別の制度化としての家族は、客観的現実として経験され捉えられている。制度は、**外在的で強制的にそこにある**。そして、

それは個人生活のこの特定の領域にその**既定のパターンを押しつける**のである。(Berger, 1967, p.13, 邦訳 p.20)

Berger は役割を例としてこうした事情を説明している。

例えば、夫、父親、または伯(叔)父の役割は、個人の振る舞いのモデルとして客観的に規定されているし、利用されている。こうした役割をすることによって、**<ただの>偶然のこと**とは自分にも他人にも思われなような形で個人は制度的客観性を見せるようになるのである。彼は、物的な衣服や装身具を<身につける>のと同じようなふうに文化的対象の一つとして役割を<着る>ことができる。(Berger, 1967, p.14, 邦訳 pp.20-21)

そして、こうしたことが次項で論じる内在化のプロセスの始まりとなる。

2-2 客体化された世界の内在化

制度や役割などを上のように活用しているだけでは内在化とは言えない。

内在化とは、むしろ、**客体化された世界構造が意識自体の主観構造を決定するほどに客体的世界を意識内に吸収しつくす**ことである。つまり社会は、今や**個人意識にとってその形成機構として働く**のである。内在化が生じた上では、個人は今や客体化された世界の諸要素を外在的実在として捉えると同時に、意識内の現象として捉えるのである。(Berger, 1968, pp.14-15, 邦訳 p.22)

つまり、夫や父親などの「役割を<着る>」のではなく、自身はまぎれもなく夫や父親であると捉えて自ずとそのように振る舞うようになるのである。そして、ふと振り返ったときも、「自分はこの女性の夫である」や「自分はこの子の父親である」などと自覚するのである。

ここにおいて社会学的認識が心理学的認識と重なり合うこととなる。社会化のプロセスである。

心理学で言えば、もちろん社会化は学習過程の一つである。新しい世代は、文化の意味づけのうちに招じ入れられ、そこで既成の仕事に参与し、その社会構造を構成する役割とアイデンティティを受け入れるようになるのである。(Berger, 1967, p.15、邦訳 pp.22-23)

こうして彼は社会という意味づけ世界の体系を充填された人間となるのである。そして、そのような存在となった彼は、以下で Berger が言うように、今度は意味づけ世界の中でその役割の代表者の一人になる。

個人は客体化された意味を学びとるばかりでなく、それに同一化し、それによって造形されるようになる。彼は、自分の中にそれを引き入れ、彼自身の意味にしていく。彼はこうした意味を所有する者になるだけではなく、それを代表しそれを表現する者になるのである。(Berger, 1967, p.15、邦訳 p.23)

このようにして内在化の過程が進行し、社会の弁証法の3つの契機の一つとして有効に機能するのである。そして、こうした見方が、「人間は社会の産物である」という知識社会学の人間観となるのである。

本節の最後として、こうして構成された主体を中心として人々による世界構築の営みを眺めてみることにする。上のように構成された各個人は、制度的にも、役割としても、アイデンティティにおいても、自身による外在化とその産物についての他者の承認と応答によって、自身と他者とで協働的で共同的に出来事や世界を構築して、同時にその中に生きる存在となる。つまり、いずれの個人も、一方で世界構築者の一人となり、他方で他者たちに適正に承認し応答されてこそその企てが達成される他者依存的な存在となるのである。そして、世界は、すべてのメンバー間におけるこうした構築的でありつつ他者依存的な相互的關係の上に構築され維持されるのである。

3 知識社会学の言語観

3-1 意味秩序あるいはノモス

宗教現象に対して知識社会学の理論的な視角を適

用しようとする試みである彼の本の第1章の終わり近くで Berger はノモス（規範秩序）の概念を用いて世界の客体化の営みと人間の関係について再度論じている。

社会的に構築された世界は何にもまして経験の秩序化だとの命題が設定されても、今なら理解してもらえらるだろう。一つの**意味秩序**すなわちノモス（規範秩序）は、**個人の個別経験と意味づけの上に押しつけられる**。社会が世界構築の企てだと言うことは、それが秩序化するノモス化の営みだということである。…人は、他の動物が与えられているような秩序化の機構を生物学的には与えられていないので、やむなく**彼の自前の秩序を経験の上にかぶせざるを得ない**。人間の社会性は、この秩序づけの営みが集合的に行われることを前提としている。(Berger, 1967, p.19、邦訳 p.28)

引用中の「社会が世界構築の企てだ」という中の「社会」には、その企てが人々の間で行われるとの意味が込められている。「集合的に」の部分も同様であることは言うまでもない。そして、こうした議論の流れでようやく言語が主題的に論じられることとなる。Berger は、経験の秩序化が、社会的世界の客体化だけでなく、社会的相互作用にも及ぶと指摘するところから始める。

経験の秩序化は、あらゆる種類の社会的相互作用に及んでいる。社会的行為はすべて個人の意味づけが他者に向けられていることを含意し、進行する社会的相互作用は、行為者たちの一群の意味づけが統合されて一つの共同的な意味の秩序になることを含意している。(Berger, 1967, p.19、邦訳 pp.28-29)

ここに言う「含意している」（原語は imply）というのは、そのように取り扱われるべきことが織り込まれているということである。ゆえに、「社会的行為はすべて個人の意味づけが他者に向けられていることを含意し」というのは、社会的相互作用に直接に関与する当事者も、またその傍観者であっても、社会的相互作用に従事したり目撃したりしたときは、個々の社会的行為には行為主体の意味づけが織り込

まれているものと受け取って、その意味づけを知る努力をするべしという要請が常に働いているということである。そして、この文の後半は、社会的相互作用については行為者たちの意味づけが全体として特定の共同的な意味の秩序になるはずだと考えて、そのように理解しようとするべしとの要請が常に働いているということである。

一つの共同的な意味の秩序が看取される以前の行為というのは、表情や視線などをも含む振る舞い方の物理的な様子と話しぶりも含めた発せられた音声に過ぎない。ゆえに、社会的相互行為を一つの共同的な出来事として理解することやそのように理解しつつそれに参画することの枢要部は、振る舞い方の物理的な様子に包まれながら発せられた音声を当該の脈絡における特定の発話として定位することとなる。発話は、社会的相互行為の上に対話者相互の共通の領域として立ち現れるものとなる。これが、具体的な社会的相互行為における発話の存在形態であり、それこそが現実の言語の実際の存在形態なのである。

3-2 ノモスを作り上げる言語

意味秩序あるいはノモスというのは、発話の存在形態の意味的な側面と言ってよい。そして、そうした存在形態が慣習化し沈殿したものが客観性としての言語である。そうした客観性としての言語について Berger は次のように論じている²⁾。

言語という事実は、たとえ単独で採り上げられたとしても、経験に秩序を課すものであることが容易に理解される。言語は、進行する経験の流動に区別と構造を課すことによってノモスを作り上げる。経験の項目が名づけられると、それは事実上経験の流動から採り上げられてその名通りの実在として安定性を与えられる。(Berger, 1967, p.20, 邦訳 p.30)

経験は、あらかじめ形を整えた事態や出来事として世界から与えられるものではない。人は言語の働きに依拠して世界の側面を言語的な事態や出来事として経験するのである (Slobin, 2000, p.107)。言語は、まだ形を得ていない未定形の経験の流動に「これであってあれではない」という区別 (differentiation) と、社会が「知っている」共同的な解釈の仕方に準

じて構造 (structure) を課す (Berger, 1967, p.20, 邦訳 p.30)。前者は、言語の働きに依拠してわたしたちは未定形の経験の流動の特定部分に注目してそれを一項目の特定の事態や出来事として捉えるということである。そして、後者は、そうして事態や出来事を捕捉しつつそれらを事態や出来事の特定の流れや展開として捉えるということである。

前者については、それが文法的な構成になっていることを認めて、語彙に統語法と文法を付け加えることによって事項間の関係に基本秩序が与えられ、さらに性や数や名詞や動詞などの細かい言語的指定も加えられると論じている (Berger, 1967, p.20, 邦訳 p.30)。

一方、ここに言う構造 (structure) が文法的な言語構造を指しているのではない点には注意を要する。この構造に関して Berger はさらに次のように論じている。

言語を基盤にし言語を材料にして、一つの社会に<知識>として通用する認識と規範の殿堂が築き上げられている。あらゆる社会は、社会が<知っている>ことにおいて、経験に共同的な解釈の仕方を当てはめ、やがてそれは先に論じた客体化のプロセスを通じて<客観的知識>となるのである。…社会的に客体化された<知識>の多くは、理論以前のものである。それは、解釈の大要、道徳上の処世訓、及び伝統的知識の集合などからなり、それらは多くの場合に一般人と理論家の間で共有されている。…あらゆる社会はその成員に対して客観的に利用可能な<知識>を提供している。社会に参加するということは、その社会の<知識>を分かち合うこと、つまりそのノモスに共に棲むことなのである。(Berger, 1967, pp.20-21, 邦訳 pp.30-31)

こうした議論は、後述の4-2の議論と重なるものである。続いて Berger は、こうした社会的に客観化された知識あるいはその総体であるノモスは、社会化の過程を通して内在化されると言う。

客観的なノモスは社会化の過程を通して内在化される。客観的なノモスはそのように個人に専有され、彼自身の主観的な経験の秩序化となる。そうした専有によってこそ、個人は自分の

生涯を意味あるものにすることができる。過去の生活の一貫性を欠くあれこれの要素は、自分や他人の状況について彼が客観的に知っている>ことの観点から秩序化される。また、進行する経験もそうした秩序の中に統合される。…未来は、未来に向けて投射されたそうした秩序のおかげで有意義な形を整える。言い替えれば、**社会的世界に住むことは秩序だった有意義な生活をする**ことなのである。社会は、その制度的構造において客観的にばかりでなく、個人の意識を構造化することにおいて主観的にも、秩序と意味づけの守護者なのである。(Berger, 1967, p.21, 邦訳 p.31)

そして、再確認する形となるが、こうした主観的経験の意味づけと秩序化も言語を基盤に言語を材料として行われるのである。つまり、言語と意味秩序あるいはノモスは志向的な関係にあるのである。

3-3 ノモスとディスコース

ここまでのところでは、Bergerが“language”と言っている部分はすべて「言語」としてきた。筆者の議論の中でも「言語」という用語を用いてきた。しかし、いずれにおいても論じられている「language = 言語」は、言語学が研究対象とする構造的システムとしての言語というよりも、むしろ発話 (utterance) やディスコース (discourse)、及びそれらが沈殿した客観性としての言語である。ここではそれらを代表してディスコースという用語を用いて一つの指摘をする。

前項の最初の引用で言及されている「進行する経験の流動に区別と構造を課すことによってノモスを作り上げる」ディスコースとは何か、あるいはその次の引用の中の「解釈の大要、道徳上の処世訓、及び伝統的知識の集合」とは何であろうか。ここにおいてわれわれは知識社会学とフォークサイコロジー (Bruner, 1990) の重なりを見出すのである。Brunerはフォークサイコロジーについて次のように説明している。

フォークサイコロジーとは、人間がいかにか「暮らしていく」のか、われわれ自身の心と他の人々の心はどのようなものなのか、ある状況下での活動がどのようなものと予想できるのか、許容

されている生き方はどのようなものか、人はそれにどのように関与しているのか、などについて、それらを多少とも関連づけながらある種標準的な形で示すものである。…それによって人々が、社会における経験、社会についての知識、また社会との関係のち方を組織するシステムである。(Bruner, 1990, p.35, 邦訳 p.50)

両者は端的に同じもので、社会学的に言うとなモスで、心理学的に言うとなフォークサイコロジーだということになる。そして、ディスコースは「進行する経験の流動に区別と構造を課すことによってノモスを作り上げ」(Berger, 1967, p.20, 邦訳 p.30)、そして創出されたディスコースは個人の経験と他者及び社会から認識される経験を架橋する共通の領域となるのである。そして、この論点は、次の4節の議論へとつながる。

4 言語についての議論

4-1 記号

以上のように知識社会学における人間観と基本的な言語観を確認した上で、本節では改めて知識社会学で言語と言語コミュニケーションなどについてどのような議論が行われているかを見る。

Berger and Luckmannは、人間の表現行為 (human expressivity) という根本のところから言語と言語コミュニケーションについての議論を始める。

人間の表現行為は客体化され得る。つまり人間の表現行為は、その表現を産み出した人と他者の双方にとって共通の世界における要素として利用可能な人間的行為の産物の中に、自らを顕現する。こうして客体化されたものは、その産出者の主観的過程を示す多かれ少なかれ持続的な標識として役立ち、さらにそれが直接的に捉えられる対面的状況を超えて利用することを可能にする。…私たちの日常生活の現実はいかように客体で充たされているだけでなく、現実はいかように客体によってのみ可能である。私は常に私の仲間たちの主観的意図を<宣言>している諸々の対象に取り囲まれている。(Berger and Luckmann, 1966, p.49, 邦訳 pp.53-54)

ここに言う「仲間たちの主観的意図を<宣言>している諸々の対象」というのは、記号的存在一般のことである。こうした一般的な認識の上で、Berger and Luckmann は、記号の現実における存在様式について考察する。

客体化ということの特殊な、しかし決定的に重要な現れ方は、意味づけるということである。つまり、人間による記号の産出である。記号は主観的意味の標識として役立つとするその明白な意図によって、客体化された他の事物から区別することができる。(Berger and Luckmann, 1966, p.50、邦訳 p.55)

Berger and Luckmann は、「X」という記号とナイフを例として記号の性質を説明している。例えば、ある日「わたし」がある人とひどい口論をして、相手が強い敵意を顕わにしていたとする。その夜、ふと目がさめた「わたし」はベッドの上の壁にナイフが突き刺さっているのを発見する。そのナイフは相手の強い敵意を象徴的に表現するものとなる。それに対し、ナイフを突き立てるのではなく、壁に「X」と書きつけてあった場合、その「X」はやはり相手の敵意を表現するであろう。しかし、「X」の場合は、相手の主観的意図を示唆すること以外は何の目的ももたないし、それ以外に何も示さない。こうしたものが、敵意を象徴的に表現するナイフの場合とは異なる、主観的意味の標識となる記号だということである。Berger and Luckmann はこうしたものを「最初から記号として用いられることを明白に意図して客体化されるもの」(Berger and Luckmann, p.50、邦訳 p.55)と説明している。このように主観的意味の標識たること以外に何の目的ももたない産物だというのが記号という客体の根本的な性質なのである。

4-2 言語

各種の記号体系の中でもわたしたちの世界構築の営みの中で特別な位置を占めるのが言語である。

日常生活の共通的な客体化ということは、根本的に言語による意味づけによって維持されている。日常生活とは何よりもまず私が他の仲間たちと共有している言語を伴った、そしてまた言語という手段を介しての生活である。それゆ

え、言語を理解することは日常生活の現実を理解するために必要不可欠となっている。(Berger and Luckmann, 1966, pp.51-52、邦訳 p.57)

言語はこのように日常生活を営む上で枢要な役割をしているだけでなく、以下に論じられているように、具体状況からの分離可能性という性質に基づいて、文化や社会の歴史的な再生産の過程においても枢要な役割を果たしている。

言語は対面的状況の中にその起源をもっているが、容易にそうした場から分離することができる。…言語の分離可能という性質は、それ自体の基本的性質として<ここいま>という主観性の直截的表現以外の意味も伝達できるところにある。…言語はその無限の多様性と複雑性によって、他のどんな記号体系(例えば身振りの体系のようなもの)よりも、はるかに容易に対面的状況から分離することができる。例えば、私は、直接の経験がない、あるいは直接経験することなど決してない事柄をも含めて対面的状況には全く存在しない無数の事柄について語るることができる。このように、言語は意味と経験の膨大な蓄積の客体的な貯蔵庫となることができるのであり、次いでこうした意味や経験を時間を超えて保存し、それらを後続世代に伝えることができるのである。(Berger and Luckmann, 1966, p.52、邦訳 p.58)

この論点は、社会との関連で3-2で指摘された言語の性質を、言語に焦点を置いて再論したものである。

4-3 対面的相互行為と自己内の言葉

Berger and Luckmann は、言語が有する、対面的相互行為と自己内の言葉に関わる役割についても言及している。

対面的状況においては、言語はそれを他のいっさいの記号体系から区別する相互性という固有の性格をもっている。会話における継続的な音声記号の創出は、対話者たちの進行中の主観的意図と敏感に同期化される。つまり、私は思いついたことを口にするし、相手もそうする。

そして、二人はいずれも相手が言ったことを事実上まさにその瞬間に聞くのである。これが、二人の主観性への不断の、同期化された、相互的な接近を可能にするのである。それは、他のいかなる記号体系も真似することのできない対面的状況における間主観的な緊密性である。(Berger and Luckmann, 1966, p.52、邦訳p.58)

自己内の言葉については以下の通りである。

私は話しながら自分自身を聞くのである。そうすることによって、私自身の主観的意味は私にとって客観的で持続的に利用可能なものとなり、事実上、私にとって<より現実的>なものになるのである。…いまや私が私自身の存在を言語という手段を用いて客体化するので、私自身の存在は、それが他者にとって利用可能になると同時に、私自身にとっても圧倒的かつまた持続的に利用可能になる。そして、私は意識的にあれこれと考えることに煩わされることなく、自然に私自身に対応することができるようになる。つまり、言語は私の主観性を私の話し相手に対してだけでなく、私自身に対しても<より現実的>なものにしてくれる、ということである。私自身の主観性を私に対して結晶化させ安定化させるといふ言語がもつこの能力は(若干の修正を伴うとはいえ)言語が対面的状況から分離された場合でも保持される。(Berger and Luckmann, 1966, pp.52-53、邦訳pp.58-59)

このように言語は、わたしの中でわたしの主観性形成の機構としても働くのである。

5 言語についての洞察

5-1 ノエシスとノエマ

知識社会学は現象学的な観点をその基礎に置いている。現象学ではノエシス (noesis、経験されるしかた) とノエマ (noema、経験されるものやこと) の相関関係において世界とそれについての主体の経験を捉える。ノエシスとノエマの相関関係についてラングドリッジ (2016) は次のように説明している。

伝統的な哲学や多くの現代哲学では (そして

日常的思考でも)、対象と主体の間には区別がなされている。主体とは対象を認識する人間のことである。ややざっくりばらんに言えば、主体とは、考え、行為し、知覚する人間であり、他方、対象は知覚されるものであり、いつもではないがしばしば、椅子とか机といった物質的な物体である。フッサールはしかしながら、すべての経験は (何か) についての経験であると主張し、そうすることで主体と対象の間の分別を、経験されるもの (ノエマ noema またはノエマの相関) と経験されるしかた (ノエシス noesis またはノエシスの相関) の相関関係に変形させようとする。(ラングドリッジ, 2016, p.18)

現象学ではノエシスとノエマの関係性は普遍的であって、分離することができないと考える。ノエシスとノエマの相関関係は志向性と呼ばれる。そして、知識社会学では、日常生活の経験について、志向性の概念を用いて以下のように論じている。

意識は常に志向的なものである。それは常に対象を志向するか、あるいは対象に向けられている。われわれは決して意識そのものというような推定上の基底のようなものを捉えることはできない。捉えることができるのはある何物かについての意識だけである。このことは意識の対象が外部の物質的世界に属するものとして経験されるか、それとも内部の主観的現実の要素として捉えられるか、のいずれを問わず当てはまる。例えば、私 (以下の例示の場合と同様、ここでも日常生活において通常の自己意識を表している一人称単数としての私) がニューヨーク市のパノラマを眺めていようと、心の不安に気づくようになると、いずれの場合でもその意識過程は志向的である。(Berger and Luckmann, 1966, p.34、邦訳p.30)

そして、「私」が直接に関与する日常生活を中心に時空間的に広がる多元的な世界に棲むわたしたちにおいては、ノエシスとノエマの相関関係は、現実のさまざまな領域の構成要素として意識に現れることになる。

さまざまな対象は、現実のさまざまな領域の

構成要素として意識に現れる。…私の意識は現実のさまざまな位相の間を移動してゆくことができる。換言すれば、私は世界を多数の現実から成るものとして意識しているのである。(Berger and Luckmann, 1966, p.35, 邦訳 p.31)

こうした現象学的な観点の下に Berger and Luckmann はわたしたちが日常的に用いる言語について次のように論じている。

日常生活で用いられる言語は必要な客体を絶えず私に提供し、秩序を設定してくれる。そしてそうした秩序の中で諸々の客体は意味をなし、そうした秩序の中でこそ日常生活は私にとって意味をなすようになる。私は地理的に名称を付与された場所に住んでいる。私は缶切りからスポーツ・カーに至るまで、私の社会がもつ技術的語彙の中で名称を付与されたさまざまな道具を使用する。また私はチェス・クラブからアメリカ合衆国に至るまでのさまざまな人間関係の編み目の中に棲んでおり、これらもまた語彙という手段によって秩序づけられている。このように、言語は社会における私の生活の座標系を示すと同時に、生活を意味ある対象によって充たすのである。(Berger and Luckmann, 1966, pp. 35-36, 邦訳 p.32)

つまり、言語はノエシスとノエマの相関関係の意識だと見ることができる。そして、外言であれ内言であれ、わたしたちにおいて立ち現れる言語がわたしたちに日常生活で生きるための糧を不断に提供してくれるのである。

5-2 世界構築の営みにおける言語の位置

以上論じたように、知識社会学では、言語を基盤にし言語を材料として、客観的現実が映し出され、それが共有され、また主観的に現実が経験されると考える。しかしながら、そのように現実や経験の基盤となり材料となる言語そのものも実は所与のものではなく、外在化と客体化と内在化という弁証法の3つの契機に基づく産物なのである。つまり、社会的現実であれ、言語であれ、経験であれ、所与で確定したものは何もなく、すべてが弁証法の契機の循環の中で造り続け、維持し続けられるほかないので

ある。すべては「不安定で変化すべき運命にある」(Berger, 1967, p.6, 邦訳 p.9) ののである。

ゆえに、ノエシスとノエマの相関関係そのものも歴史的な変化の相に晒されざるを得ない。しかし、そうした中で、やはり言語はわたしたちが日常生活の現実を構築する上で基軸となるだろう。たとえそれが長い時間の単位で見ると変化するものであろうと、わたしたちは言語なくしていかなる経験もできないし、社会的相互行為もできないし、言語なくして社会について語ることもできないからである。事情はどうあれ、言語は、観察可能なノエシスの側面を備えながら、個人の意識の形成に関わり、わたしたちの相互行為に関わり、また社会学などの理論的認識の創出にも関与する。わたしたちの経験とわたしたちの認識活動はすべて言語に依存せざるを得ないのである。

6 結び

言語の具体的な実現体は言うまでもなく発話あるいはディスコースである。3-2で論じたように、発話は個別状況的な外在化と社会文化史的な客観性の合流点あるいは融合体だと見ることができる。そして、発話はさらに文法的構造という側面ももっている。つまり、発話は、具体的な脈絡における個別的な産物であり、同時に社会文化的契機の歴史的な沈殿物でもあり、そして、その外形に目を向けると文法的構造が現れてくるということである。そして、われわれがはっきりと自覚的でなければならないのは、そのように言語の外形を客観性として捕捉して分析的な視線を投げかけた瞬間に発話はその生命を失い、物と化すということである。言語の物象化である。

現代の第二言語教育は、抽象的な言語体系であるラング(ソシユール)を教育内容として設定するところから始まった。つまり、言語の物象化から始まったのである。現在では、人間のコミュニケーション活動が注目されて、社会言語的能力などを含めたコミュニケーション・コンピテンス(Canale and Swain, 1980, Canale, 1983)が教育内容として扱われるようになった。しかし、そこでもしばしば物象化された言語表現が教育内容として扱われ、教育が実践された(Widdowson, 1983)。

第二言語教育の内容として特定の抽象化された知

識や能力を設定することには一定の妥当性があるだろう。問題は、実際の学習活動の中でそうした知識や能力に学習者にどのように関わらせるかである。本稿で論じたように言語の現実の様態は発話であり、発話は人と人との対話の脈絡でこそ生きているものである。言語の抽象的な側面や歴史的な側面はそうした具体的な発話の中に埋め込まれており、そうした埋め込み構造においてこそ生きた発話が現実を構成する契機として働き得るのである。第二言語教育者は、発話のこのような成り立ちと特性を十分に考慮して教育の企画や授業の計画と実践を行わなければならない。

一方で、本稿で論じた言語の特性に鑑みるならば、第二言語教育に関わる研究としては、第二言語の学習者や使用者が関与する社会的相互行為を研究対象とする場合に、取り交わされた言葉を書き起こして、ただ単に各発話の形態や発話相互の関係を記述したり、やり取りの構造を記述したりするにとどまっていなければならない。むしろ、そこで働いている接触場面特有の心理言語的なダイナミクスにこそ目を向けるべきであろう。そうしたスタンスでの研究を行ってこそ第二言語の習得と教育に一層関連する知見が得られるであろう。また、最近第二言語教育学の領域としてライフストーリーの手法を採用する研究が行われているが、そうした研究を行うにあたっては、ライフストーリーという現象を捉えること的前提として本稿で論じたような人間観や言語観があることを認識しておく必要があるだろう。

注

- 1) 社会文化的世界において生きることを営む人間の生の様態から言語の性質や人間的生の中での言語の位置などを探究する試みの総体をここではことば学と呼んでいる。
- 2) ただし、客観性といっても、5-2で論じるように、言語が客観的に存在するというわけではない。

参考文献

- Berger, P.L. and Luckmann, T. (1966) *The Social Construction of Reality: Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Anchor Books. 山口節郎訳 (2003) 『現実の社会的構成』新曜社
- Berger, P.L. (1967) *The Sacred Canopy — Elements of Sociological Theory of Religion*. Anchor Press. 藺田稔訳 (1997) 『聖なる天蓋 — 神聖世界の社会学』新曜社
- Bruner, J. (1990) *The Act of Meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 岡本夏木他訳 (1999) 『意味の復権』ミネルヴァ書房
- Canale, M. (1983) From communicative competence to language pedagogy. In Richards, J. C. and Schmit, R. W. (eds.) (1983) *Language and Communication*. London: Longman.
- Canale, M. and Swain, M. (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics* 1: 1-47.
- ラングドリッジ, D. (2016) 『現象学的心理学への招待 — 理論から具体的技法まで』新曜社
- 西口光一 (2003b) 「言語とコミュニケーションを再考する — バフチンとオングの言語論と第二言語教育への示唆 —」『人間主義の日本語教育』岡崎洋三・西口光一・山田泉編著 凡人社
- 西口光一 (2013) 『第二言語教育におけるバフチンの視点 — 第二言語教育学の基盤として』くろしお出版
- 西口光一 (2015) 『対話原理と第二言語の習得と教育 — 第二言語教育におけるバフチンのアプローチ』くろしお出版
- Nishiguchi, Koichi (2017) Sociocultural and dialogical perspectives on language and communicative activity for second language education. *Journal of Japanese Linguistics* 33: pp.5-13.
- Slobin, D. I. (2000) Verbalized events: a dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In Niemeier, S. and Dirven, R. (eds.) (2000) *Evidence for Linguistic Relativity*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamin.
- Widdowson, H. G. (1983) *Learning Purpose and Language Use*. Oxford: Oxford University Press.